

第五章 伝説と昔ばなし

一 伝説

1 大蛙の報恩

昔々、久万町大字東明神の高山組に儀助という資産家で、豪勇の男が住んでいました。子どもはなく、夫婦暮らしの安楽な日々を送っていました。

ある日、駄馬に荷をつけ東明神上組の日の地の畑に向かう途中、『鳶とびの巣』まで行きますと、急に馬が何物かに驚き、一歩も歩かなくなりました。儀助はしかたなく馬の前に回り、馬の口をとって引っぱってみましたがやはりだめでした。

ふと馬より一間ばかり先を見ますと、大きながま（蛙）が大きな蛇にねらわれて逃げ回り、ついに力尽きて吞まれそうになっているところだ



がまの恩返し

した。儀助はその蛙の命を救おうと思い、付近にあった丸太を手を持ち、全身の力をこめて大蛇をたたきました。そしてその大蛙を救ってやったのです。

ところが、妻が急に病気になるついに死んでしまいました。

それから二か年ばかりたったある年の正月、五〇歳足らずの美しい女の遍路が儀助の家へやって来て、一宿を乞いました。この女が下女同様によく働き、細かいところまで気がつき、何くれと儀助の世話をしますので、儀助はその女遍路を後妻として迎え入れました。

それより儀助は病に伏す身となり、日に日に病体は悪化し、いろいろ手当てをしてみましたとその甲斐もなく、なかなか快癒かゆしません。

そのとき、越中富山の薬売りが突然姿を現わし、儀助の容体を診察しました。そして、

「この病気には鳶の卵が一番よくききますが、それを採ることはたいへんむずかしいのです。でも、それを飲まぬかぎり生命は助かりません」と言って、大きなため息をもらしました。その話を聞いていた儀助は、

「それならばかの鳶の巣山に鳶の巣があります。しかし巣がかけられている松の木はあまりにも大きすぎて、この近辺にはその松の木に登れる人がひとりもいません。まことに残念でなりません」といって、涙をはらはらと流しました。儀助の話を聞いていた後妻は、

「では、私とその松の木に登って、鳶の卵を採って参ります」と言って立ち上がりました。

「男でさえ登れない大木に、なんで女の身であるおまえが登れよう」という儀助の言葉には耳もかさず、鳶の巣山めがけて走り出しました。

鳶の巣のかかっている松の木の下に着きますと、後妻はきよろきよろと四方を見回し、人のいないのを確かめると急に姿を大蛇にかえて、松の木に登りはじめました。

儀助は後妻の身を案じ、病体をおして見えかくれにあとを追って行き、この有様を一部始終見て、肝をつぶさんばかりに驚きました。

大蛇が鳶の巢に達し、卵を採ろうとした瞬間、大鳶の激しい羽音が松の木のごずえをゆさぶり、大鳶が大蛇めがけてとびかかっていききました。そして大蛇をつかむがはいかべりべりと引き裂き、大地にたたきつけてしまったのです。

そのとき、葉屋も儀助のあとを追って来ていましたが、大蛇の最期を見とけるとにわか大蛙の姿にかわり、

「先年、ここで助けていただいた大がまです。あのときの大蛇があなたを恨み、女に化けてあなたの命をねらって家へはいり込んでいたのです。それを知って御恩返しをしなければと思い、葉売りに化けてきょうの狂言に及んだのです。ようやく御恩に報いることができました」と言い、おじぎをするどこかへ姿を消してしまいました。

それ以後、儀助の病気は日に日に快方に向かい、やがて健康をとりもどしました。

これ以後、儀助の家では雨蛙のような小さな生き物でも、決して殺さぬようにと子孫に言い伝えたということです。

また、この地方の山林が、今日、土地台帳に『鳶の巢』と登載されているのを見ても、昔から鷹、鳶類の棲息したところに相違ありません。

2 お久万大師と久万町

昔、松山から高知に行く街道筋に、寂しい一つの村落がありました。そして、そこにとても気立てのやさしいおくまという名前の娘がおりました。

ある日のこと、このおくまの家にひとりの遍路さんが来て、お経を唱えて物を乞いましたので、おくまは熱心に機を織っていた手を休め、台所から麦をお皿にすくって出し、お遍路さんに与えました。

そして、また機を織っていると、前に来たお遍路さんが、チリン、チリン、チリンと鈴をならしていますので、おくまは機をおりて一皿の麦を与えようと思いました。すると、お遍路さんは、

「もう麦はたくさんもらったからいりません。今お前さんが織っているかすりの織り布を一尺五寸ぐらいもりたいのです」

といいました。するとおくまはいやな顔もせず、

「ハイ、ハイ」といってすぐにハサミで切って与えました。お遍路さんはたいへん喜んで、

「お前さんはほんとうに気立てのよい子じゃ、何か望みがあつたらなんでも一つだけかなえてあげよう」といいました。

するとおくまは、

「ごらんのようにここはさびしい村じゃが、ここを町にしてください」と頼みました。するとお遍路さんは、

「よろしい。もう二、三年したらきつとりっぱな町にしてあげよう」といって立ち去りました。

それから二、三年して立派な町ができました。その町が今の久万町で、上浮穴郡の中心として栄えています。また、そのときのお遍路さんは弘法大師様だったということです。弘法大師は、おくまという娘の名前をとって、久万町と名付けたのだと言い伝えられています。

おくまをたたえる記念として、現在久万町立久万中学校前にお久万大師堂が建立されています。

3 古岩屋のあまのじゃく

昔々、神様がお大師様にこの四国の土地に八八か寺の札所を造るようにおいてつけになりました。

そしてこの伊予の久万、(上浮穴郡久万町)にもやって来られて、お菅生さん(四四番菅生山大宝寺)をお建てになりました。

お大師様がえんま、どうの辻を通りかかりますと、向こうに小さな小屋があつて、そこからドタンパタン、ドタンパタンと音が聞こえてきます。お大師様が近づいて窓の障子の破れから中をのぞいてみますと、薄暗い土間の隅で頬かむりをした娘さんが機を織っておりました。

ちょうどお大師様は足や手が汚れていましたので、布が欲しかったものですから、

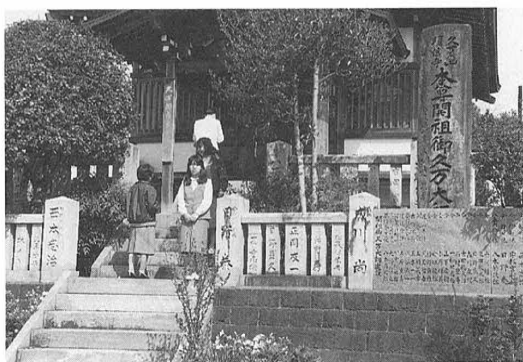
「手や足をふくんですが、少々布をくれませんか」

と頼みました。娘さんは軽くうなずきました。そして、機を織り終わると早速それを切ってくれました。お大師様はこの娘さんの親切がうれしかったのでしよう。

「あなた、なんぞ望みはないですか」

と尋ねました。するとその娘さんは、

「わたしはおくまという者ですが、ここはこんな山の中じゃけん人がおらず、夜などは寂しゅうてかなわんですけれ、町をこしらえてもろたらええと思ひます」といいました。



お久万大師

お大師様はそれを聞くと、にっこりうなずき、早速ここに町をつくり、その心の優しい娘さんの名前をとって「久万」と呼ぶことにしました。この久万の町をあとに、お大師様がさらに山の中へはいつて行くと、こんどは岩ばかりの山にきました。そこは古岩屋というところでした。神様は、またお大師様に、この古岩屋にもお寺を建てるようにいつけました。お大師様はもうだいたい嫌になつていましたが、神様のいつけなので仕方ありません。また、その山の木を伐り倒して仕事を始めました。

カツン、カツンと仕事をしていましたが、いやいややっているので仕事はちつともはかどりません。神様はどうとうお怒りになつて、

「いつまでもぐすぐすせん、今晚中にはよ建ててしまえ」といいました。

それをいけずのあまのじゃくが聞いておりました。あまのじゃくは何でも人の仕事の邪魔をするのが大好きでした。

お大師様は神様におこられたので、それからはいっしょうけんめい仕事に精をだし、もうあと少しでできあがるどころまで仕上げました。

お大師様はこらでちょっと一休みしようと思つて岩の上で

休んでいましたが、疲れがでてついとろとろとしました。気がついてみますと、もう東の空が薄明るくなりかけています。

お大師様は大あわてで仕上げにかかり、屋根瓦をもうあと一枚置いたらすむという時に、悪いことに鶏がコケコッコと鳴きました。あとで意地悪なあまのじゃくの仕業であることがわかったのですが、あとのまつりでどうにもしようがありませんでした。

気合よくそが悪いが、仕方がありません。そこでこの古岩屋にはお寺がとうとう建ちませんでした。

4 雨ごいのおかめ様

久万町二名の亀ヶ谷におかめ様という神様が祭ってあります。

昔、近くに住んでいたおじいさんが、山にかめがころがっているのを拾って帰ってきました。そうしたら夜中になってそのかめが、

「亀が谷にいぬる、いぬる」

といい出しました。それでおじいさんは気味が悪くなって、じきにまたそのかめを元の所へ返しに行きました。

そうしたら不思議なことに、にわかには空がくろうなって雨が降り出しました。今まで日照り続きで村々の人たちみんな困っていたものですから、大喜びをしました。

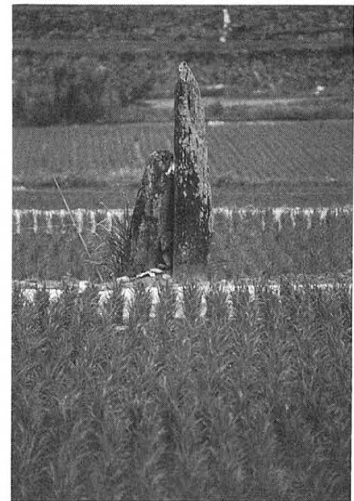
おじいさんが返しに置いて置いた時に割れたものか、祭ってあるかめは今割れています。雨ごいの神様として知られ、日照りにはお参りをしたりしているということです。

また、このかめのかげらにたまっている水は、いくら日照りが続いても絶対にかれることはないといわれています。

5 天狗の涙石

久万町大字二名

の篠崎さん方に、久保田という田があります。その田の真中に、一〇キロくらいの石が一つ置いてあります。



天狗の涙石

これが天狗の涙石といわれている石なのです。

昔、この田は庄屋さんの田でありました。村中の娘さん連中を集めて田植えをしている真最中に、裏山より一羽の天狗が飛んで来て田植え歌を歌い始めました。こうなるとは、こちらでも負けてはいられません。庄屋の命令で娘たちも一生懸命黄色い声をはりあげて歌いましたので、とうとう天狗の方が負けてしまいました。天狗はくやし涙をぼてぼてと落として山へ逃げて帰りました。その涙が石となって残ったのが天狗の涙石といわれているこの石のことです。

それより後、この久保田の田植えは、天狗の涙雨でいつも大雨になりました。それで、他の田植えは、久保田の田植えの日ばかりは敬遠して田植えを見合わせたということです。

6 久万山の法院さん

むかし、久万山に「赤鬼」という法院さんがおりました。とても力の強い人で、松山城のお倉の米の積み替えを、もうひとりの力持ちといっしょに見る間にやりとげお殿様からほめてもらったこともあるという

ことです。

また、ある時は、石墨山の山くずれがおき、ふもとの村があわやという危機に直面したとき、赤鬼の法院さんは、なだれのように落ちてくる大きな石をひとりでつぎつぎと受けとめて、村を救ったとも言われています。

この赤鬼の法院さんは、晩年、断食の行に入るため石墨山に登って行きました。行にはいるとき、鐘の音が聞こえなくなったら見に来てくれるように村人に頼みました。

石墨山のふもとの本村という村には、二日間チンチンと鐘の音が聞こえたそうです。二二日目に鐘の音が聞こえなくなったので、村人が石墨山に登ってみますと、赤鬼の法院さんは、安らかな永遠の旅に立っていました。

今でも赤鬼の法院さんのこもっていたといわれているお堂に、普通の人よりもずっと大きなお骨があるそうです。

そのお骨に人がさわると、必ず、お天気の良い日でも霧がたちこめて雨が降ると言い伝えられています。

二 昔ばなし

1 一目千両

昔むかしの大昔。

京の都に一目千両と言うものが出来たと言う評判が山の中まで聞こえて来ました。村には千両もためている人はおりませんので、だれも見に行けません。ところがそれを聞いて、ひとりの若衆わかしやうが一生懸命に働き

ました。お金をこしらえて一目千両を見に行こうと思ったからです。家内も子どももある世帯しやたい持ちのおやじがおりましたが、このおやじもそれを聞いてから、一目千両を見に行こうと思って、一生懸命に働き始めました。

ふたりとも朝は早くから起きて仕事に行き、夜はおそくまで夜業をしたので、まもなく千両の金がたまりました。おやじの方には、天井のうらにかくしてあった昔のお金が二千両も出てきたので、三千両もの金がありました。

ふたりはいっしょに京の都へ出かけて行きました。

「一目千両はどこぞなもし」

と言って、たずねて行きますと、一目千両の看板にいい具合に行きあたりました。家の中には一目千両の女がいると言うので、ふたりは千両ずつ出して、一目千両を見ました。

一目ぐらい見たのでは、じゅうぶんわからぬので、おやじはもう一目見ようと思いました。若衆は一目で千両つこうてしまったので帰ってしまいました。おやじは二度目の千両を出して一目見ましたが、それは綺麗な女きれいなでもう一目見たくなりました。まだ千両残っていたので、またお金を出して三度見ました。

ところが一目千両の女は、びっくりしてしまいました。

「今までに一目見てくれた人はたくさんいるが三度も見てくれた人はあなただけじゃ。どうぞ私の簪かんざしになってください」

とおやじに頼みました。おやじは、

「わたしには嫁も子どももあるけに、そういうわけにはいかんぞなもし」

と言いましたが、一目千両の女は承知をしてくれませんか。そこで京の一目千両の髻さんになって暮らすことになりました。それから三年の月日がたちました。おやじはふるさとのことも忘れて、楽しく日を送っていました。

三年目のある日のこと、一目千両が、

「あなたには、くに子ども家内もいるのじゃから、いっぺん帰って丈夫な顔を見せて来なされ、わたしは待っているけに、すぐに帰って来ておくれ」

と言いました。おやじもそれを聞いて急に帰りたくなくなりました。一目千両はお金をたくさん持っているので、土産物をたくさん買っておやじに持たせました。そうしておやじには、一目千両の絵姿をくれました。

「どうぞ私の姿が見たかったら、絵姿を見てくだされ。人がおらんお山で見にゃあいきませんぞ」

と言いました。おやじはお土産と絵姿を持って、ひとりだとほとほと帰っていききました。

今までいっしょに暮らしていたのに、別れて二、三日もすると、一目千両が恋しくてなりません。

どうかして姿を見たいと思って、宿の二階で、ある晩、こっそりと絵姿を出して見ました。ところが急に絵姿がぞめき（音を立てる）出しました。

チンチャン、チンチャン

チンチャン、チャン

とぞめきははじめましたので、宿の人もみんな出てきて絵姿を見ました。

これはまた綺麗な女の人じゃと言って、皆でのぞいて見ました。男はあわてて絵姿をしまいこんで、宿をたって帰っていききました。

家へ帰ってみると、家では三年も帰って来ないので、もう死んだものと思っていたところですから、たいそう喜びました。たくさんのお土産をおやじが皆にわたしたので、皆でお祝いのお客をしてくれました。

しかし、しばらくたつうちに、おやじは、都に残してきた一目千両が恋しくてたまらなくなってきました。そこで家内や親類の人にもわけを話してもう一度京へ上っていききました。

もうあと二、三日で京へ着くと言う日に、おやじは一目千両が見たくてたまらず、宿の二階でこっそりと絵姿を出しました。ところが絵姿は、今度はちょっとぞめきません。これは不思議と思いましたが、おやじはそのまま絵姿をしまいました。そうして宿を出て二、三日して京へ着き、一目千両の家まで行きました。

ところが、一目千両はもうずっと前に、病気で死んでしまっていたのでした。なるほど、ぞめかなかったのは死んでいたからなのかと思いましたが、おやじはつらくなって、一目千両の家の前で泣いていました。家の人が出てきて一目千両の墓を教えてくださいました。そこで墓へ行きますと、墓の中から一目千両の幽霊が出てきました。

「あれほどうてあったのに、わたしの絵姿を人の大勢いる宿であけたので私は死んだぞなもし」

と、うらみしました。

「わたしは、しかしお前さんにええものを上げる。これをのんでお忘れなされ」

と言って、墓のそばに生えていた青草をとって、また墓の中へはいってしまいました。おやじはその青草をきせるの中へつめてのみました。それが煙草の始まりだということです。

2 頼政のはなし

むかしむかし。中津の二籠ふたつのに貧しい母親とひとりの子供が住んでいました。子供は頼政と言う名前でした。力も強く利口な子供なので、母親は早くこの子が大きくなって暮らしの助けになればよいと、かねがね思っていました。

母親の思っているとおり、年ごろになるとよい若衆となり、やがて弓の名人となりました。

近くの村から遠くの村まで知れわたり、都へまでその名はひびいてきました。

ある日のこと、都から弓の名人頼政を召しかかえるという下知（おふれ）があったので、とうとう都へ上ることになりました。あとに残った母親は、頼政の出世を祈って二籠の池で水垢離みずごじを取りました。毎日毎日、池の水の中へはいって、神さまに願掛けをするのでした。

三日の満願の日に、母親はいつものように朝早く起きて池へ行き、池の中で、水をかけて体を清めていました。水の面をひょっと見るといつもの自分の姿はなくて、頭は猿で体は竜の姿をしたものが水に映っています。

はて、われはどうしたものかと思って、よくよく見てもわれの姿はありません。情けないことに鶴つるになってしまったと思いましたが、もうどうしようもありません。

こんな姿では中津にいてもしようがないので、息子のいる都へ上ろうと思い、歩こうとしますと、たちまちのうちに空へとび上がってしまいました。中津の村もこれがしまいじゃと思ひ、ふっと大きい息を吐きますと、父二峰の村一带に白い霧がかかりました。（父二峰の霧はこの時から始まったのだといわれております。）

都へ行ってから、母親は頼政に会おうと思いましたが、今では鶴の姿になっているので会うこともできません。仕方がないので頼政の主人の屋敷の屋根の上に、毎夜毎夜姿を現しました。頼政の主人は、そのため病気になるって、うなされるようになりました。

だれかうまく退治するものはないかと主人がふれを出しましたので、大勢の家来が我われも我もと弓を射ましたが、だれの矢にもあたりません。母親は、頼政のために頼政に射られてやろうと思ひました。いよいよ頼政が退治する番になりました。

ある雨の降る晩に頼政が矢をつがえて待っていますと、屋根の上に鶴が姿を現わしました。ひようと射ますと矢は鶴の目と目の間にあたり、鶴は屋根の上から落ちてきました。

頼政はおほめにあずかり、立派なほうびをもらってたいそう出世をしました。

3 神山の栃の木

むかしむかし、父二峰村に庄屋がおりました。庄屋の家は大きい構えの屋敷でしたが、座敷がもう古くなってきて、なおさねばならぬようになっていました。

庄屋の家の裏山は北向きの神山でしたが、そこに一本の大きい栃の木

がありました。庄屋は村の者を呼んできて相談しました。

「神山の栃の木じゃが、切ってもかまわぬかいのう」

と言いました。皆は神山の栃の木を切るとたたりがあるということを知っていましたが、相手が庄屋ですから黙っていました。そこで庄屋は皆の者に明日から手伝いにきてくれと言って皆を帰しました。

いよいよ翌朝になって、みんなは神山の栃の木を切りに行きました。斧で根元に切り口をあけましたが、どうしても一日で切ることはできませんでした。そうして翌朝になってまた行ってみますと、切り口のところにもとどおり、こっば（切りくず）がついていきます。そこでこっばを焼いてやつのことで木を切り倒しました。

その木を庄屋の家まで引こうとしましたが、木はなかなか動きません。仕方がないので近所のおばさんをお呼びして引かせると軽く動きました。

やがてその木で屋敷を建てましたが、棟上げの日に柱から火が出て、座敷は焼けてしまったと言います。

4 炭焼き長者

とんと昔。昔あるところに大分限者（大金持ち）がおりました。子供はなく夫婦ふたりきりで、大勢の召使いにかしずかれて、何不自由なく暮らしていました。

大晦日おととしがきたので、分限者の女房が昔どおりに麦飯を炊たきました。そうして主人に食べさせようとしました。

主人は、

「こなな麦飯は味も悪いし、ばさばさするけに食べられぬ」

と言って、たいそうおこりました。そうして女房が

「大晦日に麦飯を食べるのは、昔からの習わしじゃ」

と言っても聞き入れず、とうとう女房を追い出してしまいました。女房はどこといって行くあてもないし、それにもう晩方ですから、屋敷の長屋門にはいって、ひとりであてていました。

夜中ごろになって、何か話声があるので目をさましてみると、黒いちは、や、（神主の服）を着た大夫（神主）と赤いちは、や、を着た大夫が、ふたりでひそひそと話をしています。じいっと聞いていると、黒いちは、やの大夫は麦の神で、赤いちは、やの大夫は米の神であることがわかりました。麦の神が

「奥様が出されたので、わしはもう出てきたぞ」

と言えば、米の神は、

「麦どのが参るならば、わしもいっしょに出ようぞ」

と言っていきます。しばらくすると白いちは、やを着たもうひとりの神様がやって来ました。それは金の神でした。

「米どのも麦どのも参るならば、わしも参ろう」

と言って、出てきたのです。

女房は、これは不思議なことだと思っっているうちに、三人の神



炭焼きがま

様は見えなくなっていました。

しばらくして夜もあけたので、女房は長屋門を出て歩いて行きました。

三人の神様も女房に知られぬようにあとをつけて行きました。

女房は歩いていくうちに、だんだんと山の中へはいって行きました。

そうして山の中の炭焼きの爺さんの所まできました。

「わたしは行くところも無いけに嫁さんにしてください」

と頼みますと、炭焼きの爺さんはびくくりして、これは山女郎（山の中の

妖怪）がきたのではないかと思つて逃げ出そうとしました。

女房は、

「わたしは山女郎ではないぞえ」

と言つたので、爺さんはやつと安心して、

「それではわしの女房になってくれるか」

と言ひ、ふたりは夫婦になりました。

ある日のこと、女房が

「米を一升買うてきてください」

と言つて、小判を渡すと、爺さんはその小判を持って山を下りて行きま

した。途中の池で鴨が遊んでいるのを見て、小判を投げて帰つてきまし

た。女房が

「お米をどうしたかのう」

と聞きますと、小判を投げてからそのまま帰つてきたのだと言いました。

「それは惜しいことじゃ」

と言いました。女房に見えないようについできた米の神や麦の神や金の

神がいるので、これから後は家の中においても何不自由しません。それど

ころか、たいした長者になつて炭焼き長者と言われるようになりました。

5 笠地蔵

とんと昔もあつたげな。

あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでおりました。おじい

さんは、毎日山へ行って薪を取つてきました。そうして薪を背中に負う

て町へ売りにいきます。

ある日のこと、いつものようにおじいさんは町へ薪を売りに行きまし

たが、途中雨に会いました。六地藏様のところまでくると、雨は土砂降

りになつてお地藏はすっかり濡れていました。

「お地藏様、お地藏様、もう少し待ってください、わたしが笠を買うて

きますけに」

と言つて、おじいさんは薪を背に負うて町へ出かけて行きました。薪は

みんな売れたので、そのお金で笠を買いましたが、五つしか買えません。

おじいさんは五つの笠を持って帰りはじめました。

途中の六地藏様のところで、持っていた笠をお地藏様にお着せしまし

たが、一つ足りませんのでしようがありません。一体のお地藏様だけは

とうとう背中に負うて、わが家へと戻つてきました。おじいさんのうち

は貧乏で、食う米にも困つていましたが、そのお地藏様はふたりの食う

お米だけは、毎日尻から尻ひつてくれました。

それでしだいにおじいさんのうちも裕福になっていきました。

ある日、おじいさんの留守の時に、おばあさんがたくさんの米を出そ

うと思つて、たがねでお尻へ穴をあけました。ところがお地藏様はもう

お米を尻ひらなくなつてしまいました。おじいさんが晩方になつて帰つて

山の中に村がありました。村には貧しい若者が住んでいました。この若者の仕事は、町へ炭を持って行き、売りさばいてくることでした。

ある日のこと、いつものように町へ出かけて行きましたが、その日にかぎって買ひ手がつきません。

「しよのないことじゃ、こんなことなら竜宮様に差し上げよう」

と思い、村へ帰る途中の海辺で炭を海の中に投げこんでしまいました。そうして、村へ帰ってきました。

その夜、男が寝ていまずと、戸をたたく音がします。この夜更けにいったい誰がきたんじやろかと思ひ、戸をあけてみますと、今までに見たこともないような、綺麗な若い女の人が立っています。

「わたしは竜宮の乙姫じゃ。きょうはどうもありがとう。わたしをあんなの嫁さんにしてくれませんか」

と言って、家の中へはいってきました。男は、

「せっかくうちへ来てくれても、食べさせる物もないけに、早う帰ってください」

と言ひましたが、乙姫はどうしてもおいてくださいと言うので、とうとうお嫁さんにしておくことになりました。

このことが、やがて、村の評判になりました。何せ竜宮界の乙姫のことですから、とっても綺麗きれいです。村の庄屋がそれを聞いて、乙姫を貧し

い若者の手から取り上げようと思ひました。若者を庄屋の家に呼んできて「灰繩を千束持って来なければ乙姫を取り上げるぞ」

と言ひました。若者は家へ帰って考えていまずと、乙姫が、「そんなことはわけは無い。繩に塩をかけて燃やすとよい」

と教えてくれました。そこでその通りにすると灰繩千束ができました。

灰繩千束を庄屋の家に持っていきますと、今度は、

「打たん太鼓に鳴る太鼓、お手ふり上げて舞うのが舞、を持ってこぬと乙姫を取り上げるぞ」

と言ひました。

若者は家へ帰って今度も困っていますと、乙姫が、それは太鼓の中へ蜂を入れて持って行くがよいと教えてくれました。そこで言われた通りにして、庄屋の家へ持って行きますと、なるほど蜂が太鼓の中でぶんど鳴ります。庄屋の座敷で太鼓の皮を破って蜂を出しますと、刺されたいへんと庄屋は手を振り上げて逃げまわりました。

「お手ふり上げて舞うのが舞」ができたので、庄屋はいまいましたし、ようがありません。今度は、

「きみょうきんちゃく、ちゃちゃむちゃく、と言ひものを持ってこいや」

と言ひました。若者は家に帰って、今度の難題は乙姫でもよう解くまいと、心配して寝ていました。

乙姫は若者にむかつて、今度の難題は何かと聞きました。

「きみょうきんちゃく、ちゃちゃむちゃく、と言ひものを持っていかないかん」と言ひので、乙姫は、

「それはよいことじゃ。二重ふたかさねの重箱を持っていくがよい。上の箱には、赤牛を入れて、下の箱には、侍をいれておくけに案じずともよい」

と言ひました。若者は乙姫から渡された重箱を持って、庄屋のところへ出かけて行きました。

「きみようきんちゃく、ちゃちゃむちゃくを持ってきたか」

と庄屋が言うので、若者は

「ここへ持ってきたけに今からあけて見せるぞ」

と言いました。そこで庄屋は、座敷で大勢の家来衆といっしょに、若者の持ってきた重箱を見ることになりました。

若者が重箱をあけてみますと、上からは赤牛がたくさん出てきました。庄屋が、

「これはきみようきんちゃくじゃ」

と言っているうちに、その赤牛が家来衆に角で突きかかっていきました。

「これはちゃちゃむちゃくじゃ」

と言っているうちに、今度は下の箱から侍が出てきて、庄屋や家来をみんな斬ってしまいました。

そうして、若者はかわりに庄屋になり、乙姫といっしょに安楽に暮らしました。

8 八兵衛

とんと昔もあったそう。

年から年中、風張りをして暮らしている八兵衛と言う男がおりました。ところで、どこで金をくめんしたのか八兵衛は伊勢参りに行きました。

伊勢の宿で、大阪の住友の旦那と知り合いになりました。住友というのは大した長者のことですから、八兵衛はおのれも負けてはならじと、

「わしの村の家はみんなわしの持ち物じゃ」

とほらを吹いておきました。住友の旦那がそれを聞いてびっくりして

「それでは、わしの娘をもううてくれるか」

と頼みました。八兵衛は、

「よっしゃ、引き受けた」

と言いました。八兵衛は旦那と別れて村へ帰りましたが、帰るとすぐに庄屋の家に行きました。

「庄屋の旦那、庄屋の旦那。お頼みがござる」

と言えば、庄屋は、

「何の用事か」

と問い返してくれました。八兵衛は伊勢の宿で住友の旦那と約束したことの、一部始終を話しました。

庄屋は、そこで、村中の家に八兵衛という名前をつけてくれました。やがて住友の方から便りがあった、いよいよ住友の娘が八兵衛のところへくることになりました。どの家も人が住んでいるので、人の住まぬ幽霊屋敷を借りて、その家で祝言することになりました。

庄屋どのや村の人も祝言の席にすわって、いっしょに祝いました。みんなが帰ってから夜中になって、庭で火がちろちろと燃えました。

八兵衛は、娘に、

「せっかくきてくれたのに、この屋敷にはあやかしがいるけにおられん」

と言いました。娘は、

「あれは金の石じゃ」

と教えました。そこで掘ってみると、中からたくさんの金の石が出たので、八兵衛は大金持ちとなり、名札を掛けておいた家は全部買いとるほどの身代となりました。

9 桶屋さんと山女郎

昔、久万山にひとりの桶屋さんが住んでいました。ある日、自分との庭先で桶の輪替えをしようとしました。夕方になったんでもう仕事をおこうと思うて、ひょいと顔を上げますと、目の前に山女郎がきて立っとなりました。

山女郎は桶屋さんを見ながらニヤリニヤリと笑うとります。口が耳まで裂けて、とても恐しい顔をしておりました。

桶屋さんは、恐しゅうて恐しゅうてたまりません。そこで家においでる鉄砲で撃ってやろうと考えました。すると山女郎は、

「お前は、今わしを鉄砲で撃ってやろうと思ひよろうが」

と言いました。桶屋さんはたまげてもうて、

「これはいかん。心の中で思うとることがみなわかってしまう」

と思ひ、いよいよ恐しゅうなりました。

そこで、もう何も考えずにせつせと竹の輪をこしらえとりました。すると竹がはじいて山女郎に当たりました。今度は山女郎がたまげてもうて、

「人間は、心で考えんことをするけん恐しい」

と言うて山へ逃げていきました。

10 たくあん二きれ

上浮穴の山奥に父子が住んでおりました。息子も年ごろになったので隣村から嫁さんをもりました。

里がえりに行く時に、嫁さんが婿さんに、

「あなたはそそっかしゅうて、お茶を飲んでもすぐに口をやいて、大き

わぎをするから、お茶を出された時には、『すまんが、たくあんを二きれください』というて、お茶をさましてから飲みなはい」

と前もつていい聞かせ、里へいっしょに出かけて行きました。

里へ着くと、嫁の母が、

「疲れたらうから、お茶でも飲んでいなさい。そのうち風呂でも沸くから」

といつてお茶を出しました。くる時に嫁さんに教えてもらった通りに、たくあんを二きれもろうてお茶をさまして飲んだので口をやかずにすみました。

そうこうしているうちに風呂も沸きました。母が、

「さあ、お風呂が沸いたから早くおはいりなさい」

と言いました。

婿さんはさっそく風呂に入ったのですが、湯が熱かったので

「たくあん二きれ持つてこい。たくあん二きれもつてこい」

と大声でいきました。

これには嫁さんも困って、

「馬鹿にはものを教えても役にたたんわい」

と言つてなげきました。

11 エンマの又平

久万に又平という馬方がおりました。その又平が病気で死出の旅に立ち、ぶらぶらと行きよつたらふたまたになったわかれ道がありました。

そこには「右は地獄、左は極楽」と書いてあるので、又平は悪気を出して右へ行きました。すると、本物の地獄へきてしもうて、これは残念と

思ったがしかたがありません。

ある日、又平は、エンマに魚をとりに行かんかと誘い、又平はおもしろそうに魚をとって見せました。

「エンマはん、あんたもとってみんかな。着物が汚れるからわしのとかえなさい」

と言って、着かえさしました。

そして、エンマが川の中で魚をとつとるすきに又平は走ってもんて、鬼どもに、

「又平は川で魚をとつとるけん、連れてもんで火あぶりにせよ」と命令しました。すると鬼たちは急いで川へ行つて、

「又平、なにをしとるか」

と、わしはエンマだといつても聞かず、火あぶりにしてしまいました。それからのエンマは久万の又平だそうなの。